

“学びをひろげる わたしと○人の会”

第13回研究会（2015年11月28日）報告

（“平和人権子どもセンター・教科書資料館”代表）

吉岡数子さんの報告は、ひとりの教師の83年間の個人史をひもときながら語られるものでした。その個人史の背景に日本という国の歴史や、それと重なるように中国、朝鮮など東アジアの国々の歴史が幾重にもつながってみえてきました。実践報告とは45分の授業の記録を話したり、長くても1学期の取り組み、あるいは1年間の経過報告だと思い込んでいた私にとって、それは衝撃的なことでもありました。例えば吉岡さんが教師になろうと決意するときも、算数の授業をしているときも、教室から飛び出す子どもと語り合う時も、総合学習に取り組むときも…、いつも実践の一つ一つに、いわば歴史の必然性が宿っているかのように思えました。

極めて簡略にプロフィールを紹介します—

1932年朝鮮に生まれ、1937年、傀儡「満州国」へ移住。1944年、日本へ帰国。敗戦で教科書の墨塗りを体験。1955年、京都学芸大学を卒業。大阪・堺市で小学校教員として勤務するかたわら平和・人権学習の教材化・パネル化に取り組む。1991年に退職して、堺市立「平和と人権資料館」に嘱託勤務。1997年、私設「平和人権子どもセンター」を設立、その後「教科書総合研究所」を開設、現在に至る。このたび、北岡順子さんと共著で『教科書が語る戦争』（大阪公立大学共同出版会発行）を出版されました。

吉岡さんのお話しは、大きく四つの時期に分けられるかもしれません。①朝鮮・満州での体験 ②敗戦という時代の変わり目 ③大阪での教師時代 ④退職後の私設「平和人権子どもセンター・教科書資料館」の活動。

（仮に第1期と呼んでみます）

朝鮮総督府官吏であった父親のもと、「略奪のかたちで入手した（池が三つもある）官舎」で幼年時代を過ごす。使用人の娘のアイさんが「ここは私の家だった」といった言葉が忘れられず、子どもの目から見てもおかしいと植民地支配の実相を感じていた。満州国の「満拓」官舎に転居。1939年新京桜木小学校入学。

1年生の担任山下先生との出会い。記念写真を見せながら、「男女混合の自由な並び方で写っているでしょ」といわれる。初めて入った教室の黒板には、真ん中に山が三つ描いてあった。そして山の下に生まれたから山下です、と紹介された。次の日には川が描いてあり、「川」の漢字と川のことを勉強する。翌日行くと、木が描かれてあって、「木」の字や、山のことを学習する。日々絵が描き加えられ、新しいことを勉強するので、毎日学校に行くのが楽しくてたまらなかった。1年生、2年生は「完全な総合学習」だった。この山下先生と総合学習との出会いと経験が、その後の人生に大きな影響を与え、敗戦の変わり目・移り目の大転換を受け入れることができたし、その後の総合学習を核とする吉岡さんの教育実践を生み出すこととなった。

1941年3年生のとき、国民学校となり「今日から少国民となります」と言われ、軍国主義教育へと変わっていった。太平洋戦争勃発、時代の変遷にのまれるように少国民へと変わって行く吉岡さん。そして敗戦。全文暗記させられた「国史・地理・修身」を前頁墨塗りをさせられた。

この「1期」だけでも、山下先生のことや当時の総合学習の内容、さらに戦争中になぜそれができたのか、あるいは吉岡さんの人生に何が決定的な影響を与えたのか、など聞きたいことが山ほど出てきます。

教師になるとの決断。「教生」時代のコアカリキュラムとの出会い。指導要領で「総合的な学

習の時間」がつくられる以前から、吉岡さんが「隠れ総合」と呼ばれて精力的に取り組まれた総合学習のことなど、教師時代の実践の数々にも興味が尽きません。1980年代の終わりごろに、時間割表なし・チャイムなし・教科書なしの学校ぐるみの総合学習を取り組まれたり、1・2年生の総合単元の授業として、「だれのパンか麦日記」という、一つの单元だけで国・算・社・理・体・音・図・道徳・学級会のすべての教科を学習する実践も取り組まれています。そして、現在に続く「平和人権子どもセンター・教科書資料館」の活動についても、お聞きしたいことばかりです。

研究会の3時間の枠で収まるものではありません。参加者の全員がお話にくぎ付けになり、もっと学びたいという思いに駆られました。そこで、「学びの会」として「平和人権子どもセンター・教科書資料館」への研修ツアーを企画することにしました。

激動の歴史の中を歩いてこられた吉岡数子さんの人生をうかがいながら、私（松森）は、83年の歴史を通して頑として揺るがない「学ぶことは楽しい」という吉岡さんの信念を見た思いがしました。（教師・大人が）「教えることは楽しい」では決してありません。子どもが学ぶことは楽しい。教師・大人も学ぶことは楽しいということ。それは幼児期でも、戦争中の軍国主義の世の中でも、敗戦という価値の大転換と混とんの時代でも、現在の右傾化する社会や、教師の体制化が急速に進行する教育体制の中でも、吉岡さんのゆるぎない活動を支える最大のエネルギーになってきたのではないのでしょうか。その原点をさらに学びたいと思いました。